

四才児の

競争あそび

について

石黒京子

三才児と比べると四才児の身体的発達は全くめざましい。つい先頃まで最年少の組の間は、かけっこしまししょう、鬼ごっこしまししょうと、先生に誘われてやりだしても、何となくよちよちとしたそのあとけない走りぶりに思わずほほえましくなってしまうたり、調子をあわせてゆっくりゆっくりと走ったりしていたのに、四才になってからの此の頃はちよつと本気になって走らないと追いつかれてしまいうまほほど、スピードの出る人さえもある。

鬼ごっこでも、かけっこでも、また、かご

めかごめとか、花いちもんめ、あぶくたつたにえたつたなどの集団的なあそびをしているときなどにも、先生が入るとその遊びが一だんと活潑化するのには、三才も四才も同じだが、厳密にみると先生の位置の違いは大大大きい。即ち、三才児の競争あそびにおいては、先生は純粹にリーダーであり、そのあそびは先生を中心として動くことが多かった。たとえば、先生が鬼になったとき、子どもの興味と喜びは最大限に強まり、たまたま用事などのため遊びからぬけると、まもなく遊びは解散されてしまっていたことから明らかである。

四才になると、それほど先生が中心に立たなくても、子どもたちの間から競争あそびの発案者が現れてくる。今までの経験から先生を誘いに来る子どももある。そして次第にルールをえとくして、大勢でいっしょに仲よく遊べるように子どもたちは成長していく。三年保育時代にみられた、負けたり、鬼になったりしたときにやめてしまう態度は、四才児になると殆んど見られない。また、リレーなどをしている、夜中で走っていて転んだときなどに、わつと泣きたい気持をおさえるのは、友だちからかかる応援の声であり、それと共によびおこされた現在の自分のポストという自覚であろう。転んでも泣かないで、とか、鬼

になったときやめたらいけないなどは先生は言わなかった。しかし、子どもたちは子どもたち同志いっしょに遊んでいる間に、おのづから一定のルールを創り出し、タブーを発見することがある。それは全く、与えられたものでなしに、自治的につくり出したものである場合が多い。こうして子どもたちは、競争あそびを楽しくしている間にも、不文律としての社会性を種々と身につけていく。

競争あそびに必要な要素は、思う存分に走りぬけるような身体的発達と、そこで行われる遊びの仕方を正しく理解する知的能力と、更に最も重要なのは、自分と友だちという関係を意識して、その間を一定の距離をもって比較することができるようになったときに起る競争意識というものである。あそびの種類の中で、友だち関係の入らない一人あそびや平行あそびをしている間は、競争意識はあまりわき上ってこない。四才児は、入園当初のぞいては、いつまでも一人あそびをしている子どもは少く、友だちを多く求めるようになってきているし、三才の頃とくらべると交友関係も少し複雑になってきている。比較的多数のグループで遊べるようになった子どもたちが、自分たちで友だち関係を意識し、そしてその仲間の中における自分の位置づけを意識したときに、競争意識はおのずからたか

まってくる。その気持に適當な補助的指導が加われれば、競争あそびへと發展させることは容易である。

しかしながら実際には、自由あそびの中で競争あそびをしているときは、次第に多人数の子どもが、このあそびの面白さがわかってきて、より多く集まって来るのであるが、その反面いつでも遊びに加わらない子どもが一部にできている。どんな場面でも、引込み思案の消極的な性質の人はなかなか参加しがたいものであるが、とりわけそこで行われるあそびが、競争というものが主体となつて現われている場合、自分の力に自信のもてない子どもは勿論のこと、それとは反対に勝気すぎるとしてあつかうと皆が喜んで参加するから面白い。たとえば競争あそびとして一番単純な形のかけっこを、リズムあそびのときいつも自由表現でしている動物や乗物のあそびで早さくらべにもつていただけでも、リズムに合せながらも、力いっぱい、そして思う存分の表現をとつて、しかも競争でするのであるから大喜びである。また少しすすんでは、チ

ームをつくつてあそぶリレーも、かけっこと同じように種々のものになりながら楽しくあそべる。更にグループのみんなの協力によつてできるポートルースもあるし、力の面においては、ひっぱりっこや、おすもうごっこなど、リズムあそびの中であつかえる競争ゆぎの数もとりあげれば少くない。そしてこれらのどれにおいても、いつも子どもたちがリズムあそびに喜んでのつてくるのと同じく、いや場合によっては、競争という意識の下につくり出されるふんいきによつて、いつも以上に感興深くその日のリズムあそびはすすめられるのである。

このようにリズムあそびの中で、競争ゆぎをとりあげてあつかう際には、先に、ふだん遊んでいる間に子どもたち自身でよく自治的にルールなど定めている場合のみられることを述べたが、このように組中全員で一つの遊びをする場合などには、遊びの基礎となるべき規律、原則などは、勿論先生の指導として適切に与えられることが大切である。

しかし何といつても四・五才児の幼稚園の段階では、級の中の全員が一人残らず競争するという気持にめざめているわけではむしろないし、中には基礎的な法則なども数度行つてもはっきりのみこんでいない子どももいるし、リレーをしても、二組にわかれて自分は

その一方の組の中の一員だということが理解しきれず、二人並んでいればその隣の人と並んで走るのだとのみ解釈している子どものいたりするのが、実際の状態である。しかしあえて徹底しなくても、それでもよいのではないだろうか。大人の眼からはたとえ完全な形のものになっていなかったとしても、四才という年齢では無理もないことだし、それよりももっと大切なことは、四才児として一人一人が思う存分の力を出しあつて楽しくあそぶことができているだろうかという点である。そして更に一歩進めて、皆の協力によつて団体あそびがより一層楽しく發展できるということが、競争あそびをしている間に、次第に子どもたちの間に敷衍えんしていく力をもつているとしたならば、幼稚園という教育の場面において、奨励したい遊びの一つとして、競争あそびがとりあげられても意義あることと思つう。

(お茶の水幼稚園)

○第三回全国国公立幼稚園教育研究協議会は、去る七月三十、三十一日の両日、全国国公立幼稚園長会、京都府・市教育委員会の主催、文部省の後援のもとに、北畠山延暦寺根本中堂において開催されました。